

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム映画の中の宗教文化報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-12 キーワード (Ja): NDC8:371.6, 教育学. 教育思想, NDC8:161.3, 宗教学. 宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」・第2グループ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001574

趣旨説明

井上順孝



国際研究フォーラム『映画の中の宗教文化』を開催させていただきます。本日の会議は基本的には日本語でやりますが、必要に応じて英語には同時通訳といたします。発表のほうはだいたい30分ないし40分の間、レスポネントのお話も10分以内ということで願います。もし若干の時間的余裕がありましたら、1人、2人その場でご質問をお受けする、時間がなかったら総合討議に廻させていただく、というやり方にしたいと思います。

総合討議のときに質問をしたいという方は、あらかじめ受付のところにある質問用紙に簡単でけっこうですから、お名前と、どなたに、どんなテーマで聞きたいということをお書きください。

最初に、今回のフォーラムに関して、簡単に趣旨を説明させていただきたいと思います。このフォーラムの主催は、國學院大學の研究開発推進機構日本文化研究所のプロジェクト「デジタルミュージアムの構築と展開」と、科学研究費補助金「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」です。科学研究費補助金による研究は、2008年度から2010年度までの3年間の計画で行なわれていまして、今年度は2年目に当たります。フォーラムのテーマが宗教文化ということになっていますが、科学研究費補助金による研究では、宗教文化教育の教材について考えるのが一つの課題として設けられております。そこで、映画というものを宗教文化教育の教材として、どういうふうに用いたらいいのかということが、議論の焦点の一つとなります。

宗教文化教育にとって、充実した教材を教員が協力して作っていく、ということは、非常に重要な意味をもちます。宗教文化について学生たちに教えるには、宗教の中核的な部分、つまりそれぞれの宗教の教典とか教義とか、あるいは修行方法とか宗教施設がどのようなものであるとか、そうしたことを適切に解説する教材というのが必要であります。それと同時に、宗教は普通の生活、文化の中に多様に息づいています。習俗、習慣、あるいは一般には宗教とはあまり関係がないと思われているもの、例えば芸術作品、文学作品、そういったものにも宗教的要素はいっぱいあります。映画というものは、これら全てに関わると言ってもいいかと思います。映画は宗教の中核部分にあるようなものから、文化の中に溶け込んださまざまなものを扱っているので、いわゆる宗教映画だけではなくて、喜

劇映画、ミステリー映画、恋愛映画、ドキュメンタリー映画といったさまざまなジャンルの映画のなかに、宗教文化に関わるテーマを数多く見出せます。

そういったものを、この時代の宗教文化教育に利用することの意味はなんだろうかということについて、最初に述べておきたいと思います。1つは、今日のように世界全体がグローバル化しつつある時代には、いろんな国の宗教文化を学ぶという態度が、これまで以上に強く求められるわけですが、その際に、映画というのはいくつかの利点を持つと考えられます。映画の多くはフィクションですけれども、逆にそうであるが故に、宗教問題をリアルに描いているということもあるわけです。実際の問題としては描きにくいものも、映画という形でなら、表現できるかもしれないということです。

それから文字情報に比べると、映像というのはそれ自身多様な情報を含んでおりますので、インパクトも強いですし、ひとつの場面の中に宗教文化に関するいろんな情報が込められている、という可能性がありえます。それから、かつては映画は映画館でなければ見られなかったですが、今はビデオ、DVD、場合によってはインターネットでも見れる。必ずしも映画館に行かなくても映画が見れるわけで、これはつまり「映画館からの解放」とも呼ぶべき時代に我々はいることになります。この状況は映画を教材として用いる上で、非常にやりやすいということが分かります。映画館でしか見られないという場合であると、一定期間の上映が終了した映画をもう一度見るというのは、なかなか難しかったです。しかし、今は学生に「この映画を見たら面白いよ」と気軽に言えます。たいていビデオやDVDを借りて見ることができるからです。そういう意味においても、今は映画を教材として使いやすくなった時代です。

また、こういう情報化時代ですので、自分の国以外でどんな映画が作られ、どんな映画がその国で話題になっているのかを知るのも極めて容易になりました。そういう意味で我々は便利な世の中にいるわけですけれども、ただ、そこには他方で落とし穴もあるわけです。誤解とか、偏った立場からの映画もありますし、ある映画によって、かえって民族と民族、国と国とのコンフリクトを増すとといったこともありうるわけです。そういったことにやはり宗教文化を教えようとする人は、今まで以上に繊細であるべきです。ある見方を押しつけるということではなく、いろいろな角度から考えさせなければなりません。そういう意味においてプラスの面とマイナスの面、とくに危険な面というのは、映画を見せる上で絶えず考えておかななくてははいけません。

しかしこうしたことは一人の教員がやろうとしてもなかなか難しいでしょう。互いに情報や意見を交換し合うことが求められます。ある宗教文化について理解を深めさせようとしたときに、この映画を扱うのがいいのか、あるいは問題があるのではないかと、といったようなことを議論する場があれば、各自が持っているイメージというものも広がりますし、

より適切な利用に至りうるかと思えます。もともと映画というのは、見る人によって解釈はさまざまですし、学生たちは我々以上にそこで展開されているものを繊細に受け止める場合もあると思えます。予想以上に強い影響を受ける場合も考えられるわけです。そういった点では、私は映画を見るということは一種のフィールドワークに近い面もあるように思います。どのようなことをそこから得るか、どのようなものがそこで創造されるか、というのは、まったくそれぞれの人の映画の見方にかかっている、という面があります。したがって、映画を教材にするという場合には、そのことは念頭に置いておくべきことではないでしょうか。

しかし、そういういくぶん重い問題もありますけれども、私は映画はやはり楽しむべきものではないかと思っています。楽しむということがまず出発点にあって、その上でそれを、授業なり、いろいろな宗教文化の理解を深める役にも立つかもしれない、という発想でいいのではないのでしょうか。「これを見て君はこれを理解しなくてはいけない」というふうに重く迫らない方がいいかもしれない。とはいえ、考えさせる道具として、映画はなかなか優れた教材たりうる、というふうに思っております。そういう意味で、今日はいろいろな分野の方、いろいろな立場の方からの議論を、私は非常に楽しみにしております。映画を宗教文化教育の教材として考える場合に、シンポジウムが終わった時点で、それぞれに視野の広がりを感じられれば嬉しいかなと思っております。

簡単ではありますが、これで趣旨説明を終わらせていただきます。